

明治37年(1904)石川県七尾市に生まれる。四高を経て、昭和5年東京帝國大学農学部農学科を卒業、引き続き大学院にて造園学を専攻された。

昭和7年に都市計画大阪地方委員会に就職されたが、同12年応召、約4年間も中国戦線に動員された。その間、田治少尉は、軍務の傍ら余暇を活用して、中国庭園史の資料を蒐められ、特に北京の紫禁城西苑の現地を調査されていた。田治氏はもともと日本庭園の源流と中国庭園史との関連に注目されていたが、それが戦後になって纏められた学位論文となつたのではないかと考えられる。

昭和16年には召集解除となり、都市計画愛知地方委員会技師に復職され、名古屋広域緑地計画の策定に当たられた。戦争末期(昭和19年)には再び大陸に渡られたこととなつたが、それは満州国新京特別市の公園科長(佐藤昌氏の後任として)を引受けられたからである。終戦まで僅か18ヶ月の短期間であったが、新市の公園建設に尽力されたほか、熱河離宮(避暑山庄)の調査実測にも協力され、中国庭園史研究への熱情を傾けられた。

戦後においては、引揚後一時、総理府技官として調達監査の仕事に従事されたが、昭和29年に退官され、大阪市の土木局公園課長(後に公園部長に昇格)に迎えられ、公園緑地行政に円熟した腕を振るわれることとなつ



た。その主な業績として、長居公園・大阪城森林公園・鶴見大緑地等があげられる。氏はまた優れた庭園設計家としても活躍されたが、リバー・サイドに立地する市長公館庭園もその傑作の一つであろう。

昭和40年には公園部長を定年退職され、引き続き大阪市公園協会の常務理事として活躍されたが、昭和53年(1978)1月、過労の故か、心筋梗塞にて急逝され、惜しくも73才の生涯を終わられた。

田治博士の数多くの業績のなかから代表的なものは何かといわれれば、次の二つをあげることができる。一つは、研究面におけるライフ・ワークであるところの学位論文「紫禁城西苑史——西苑を通して見た中国庭園の諸相」(1958)であり、それは中国の古都計画史の一翼を担うものとして国際的にも評価されるものである。もう一つは、EXPO大阪(1964)における政府出展の日本庭園の主任設計者としての業績であり、その成果は永久に保存されるべき素晴らしい日本庭園として評価されている。

以上のように田治六郎博士は、学術面においてもまた計画設計の実際面においても、特筆すべき業績を残され、忘れる事のできない人である。それらの功績に対しては、「建設大臣表彰」(昭和41年)、「日本造園学会賞」(昭和44年)、「勲四等旭日小綬章」(昭和49年)等が授与されている。